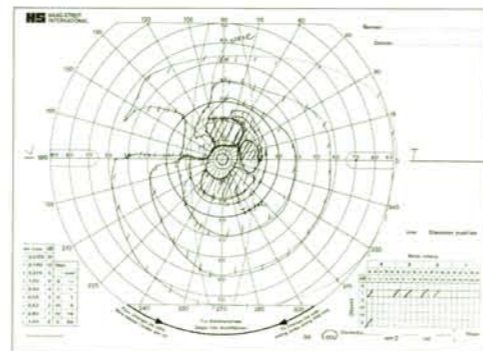


若くてもなる？ 緑内障

胞外マトリックスが沈着して、眼圧が上昇する場合があります。

緑内障は早くに発見して治療を行えば、視野のダメージは軽くてすみますが、末期になって進行した視野は治療しても回復しません。したがって若い方でも検診による緑内障の早期発見・早期治療が大切です。(池田陽子)



日本人の緑内障の有病率は40歳以上の5%です。欧米に比較して正常眼圧緑内障が多いことが特徴です。一般に緑内障は初期には自覚症状が無いため、中期以降になるまで自分で気づくことが少ないようです。

3歳くらいまでの乳幼児に発症する先天緑内障は角膜の異常を合併することが多く、母親が異常に気づくほか乳幼児検診などで発見されます。また、思春期前後に発症する発達緑内障は眼圧上昇による自覚症状(つかれ、ぼやけなど)が出るため眼科受診で発見されることが多いのですが、自覚症状がない正常眼圧緑内障では、気づいた時には既に進行してしまっているケースがあります。

一方、ステロイドによる眼圧上昇が原因で起きるステロイド緑内障は、自覚のないまま進行することがあります。眼科でステロイド点眼を処方する場合には眼圧に気をつけて経過を見ていきますが、膠原病やアトピー、アレルギー性鼻炎などの疾患のために他科でステロイド剤を投与される場合には、必ず眼科で定期的に眼圧を測定する必要があります。ステロイド投与によって房水流出路である隅角に異常な細

治る 黄斑円孔

網膜の中心部にあり、最も解像力が高く視力にとって重要な役割を果たしている部分を黄斑といいます。この黄斑に円い孔があく疾患が黄斑円孔です。網膜の中央に孔ができるため、症状としては、真ん中が見にくくなって読もうとする文字が消えてしまったり、変視症といって、ものが歪んで見えたりします。結果として視力が大幅に低下してしまいます。

黄斑円孔の発生には網膜の前に詰まっている硝子体というゼリー状の物質が深く関わっているといわれています。この硝子体は加齢に伴って変性、収縮していきます。その際に、黄斑部と硝子体の癒着が強いと、硝子体が収縮する時に黄斑が引っ張られてしまい、孔があいてしまうのです。

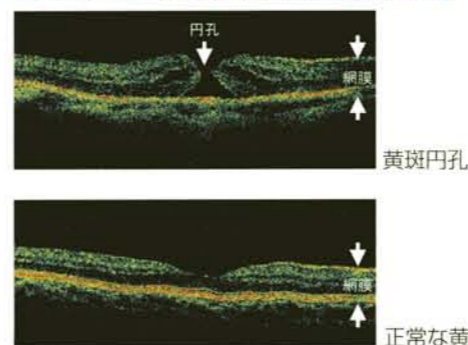
黄斑円孔は60歳代の方に多く、女性に発症頻度が高い

ようです。

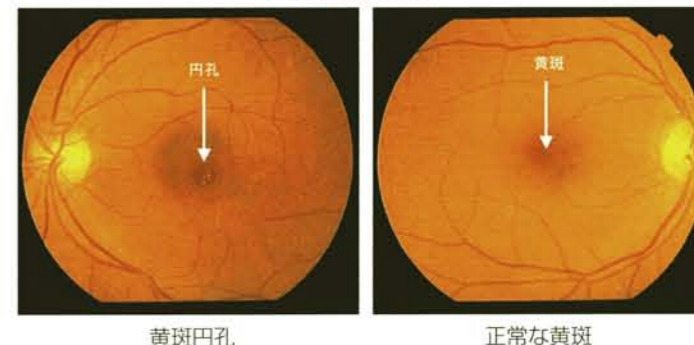
黄斑円孔は自然治癒することは極めてまれで、飲み薬などでは治すことはできません。また10年、20年前までは手術でも治すことは非常に困難でした。しかし最近、手術機械や手技の進歩、硝子体を可視化する薬剤の登場などにより、手術治療が可能になりました。手術により円孔の閉鎖は9割以上の方で得られ、その結果6割以上の方で視力の回復が図れます。黄斑円孔の診断も光干渉断層計(OCT)などの機器の開発で容易になりました。

手術は硝子体を取り除いて、代わりにガスを詰め、網膜の内縁側にある内境界膜を剥がし、網膜が伸展して円孔が閉鎖するのを促します。手術は、発症から早ければ早いほど視力回復の期待度も高まります。(小嶋健太郎)

光干渉断層計(OCT)による黄斑円孔の所見



黄斑円孔の所見



ステロイド点眼液の功罪

ステロイド薬の使用にあたっては、副作用に十分留意せねばならないのは、点眼液の場合も同じです。強いステロイド薬を使用すると、気づかぬうちに眼圧が上昇し、ステロイド緑内障を引き起こすこともあります。非眼科医の先生方をお願いしたいこと、それは、とくに小児や若い患者さんへのステロイド点眼薬の投与については、眼科医に相談していただくか、眼圧への配慮を怠らないことです。

＜作用の強弱に注意＞

認可されているステロイド点眼液の種類は、あまり多くありません。おもなものは0.1%ベタメタゾン(商品名リンデロン)0.01%ベタメタゾン(同)、0.1%デキサメタゾン(商品名デカドロン)、0.1%フルオロメトロン(商品名フルメトロン)、0.02%フルオロメトロン(同)です。ただ、ベタメタ

ゾンやデキサメタゾンは、同じ濃度のフルオロメトロンに比べて約10倍の作用の強さがあることを忘れてはいけません。

＜ステロイド緑内障＞

こうしたステロイド点眼液は効果も大きく、重症アレルギー疾患にしばしば使われるようになりました。アレルギー性結膜炎、なかでも子どもの春季カタルによく用いられ、ウイルス性の各結膜炎でも使われる場合があります。時には、1カ月を越えて長期に用いられることもあるようですが、この場合、何より怖いのがステロイド緑内障の発症です。

＜子どもに多いレスポナー＞

緑内障は眼圧の上昇によって引き起こされますが、ステロイドによる眼圧上昇は、自覚がない場合が多く、計らねばわからないケースもあるのです。また、眼圧の上がりやす

いステロイドレスポナーは、若い人ほど比率が高く、子どもでは3~4割にもなり、点眼を続けて春季カタルが改善したものの気がつくとも末期緑内障になっていたという例さえあります。

＜眼圧チェックが必須＞

眼科医の場合、緑内障を恐れてステロイドを使わなさ過ぎる傾向があるようですが、非眼科医の先生方で、もしステロイドをお使いになる場合は、0.1%フルオロメトロンを上限にしてはいかがでしょう。そして、1カ月以上処方する場合は、眼科で定期的に眼圧をチェックしてください。もう一度言及しておきますが、とくに子どもの場合、自覚症状がないために重症に陥りやすいのです。(木下 茂)

